

雲仙岳の火山活動解説資料（平成 28 年 2 月）

福岡管区気象台
火山監視・情報センター

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められませんが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっていますので、今後の火山活動の推移に留意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 2 月の活動概況

・噴気など表面現象の状況（図 1、図 2-①③）

白色の噴気が時々観測され、最高で噴気孔上 20m まで上がりました。

・地震や微動の発生状況（図 2-②④、図 3）

火山性地震の月回数は 30 回（1 月：24 回）と、少ない状態で経過しました。震源は、普賢岳付近の海拔下約 2 km に分布しました。雲仙岳では、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっています。

火山性微動は 2006 年 11 月以降、観測されていません。



図 1 雲仙岳 噴気の状況
（2 月 26 日、野岳遠望カメラによる）

この火山活動解説資料は福岡管区気象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 28 年 3 月分）は平成 28 年 4 月 8 日に発表する予定です。この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局雲仙復興事務所（長崎県経由）、九州大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 26 情使、第 578 号）。

・地殻変動の状況（図 4、図 5）

GNSS¹⁾ 連続観測では、新湯－田代原、田代原－小浜（国）の基線で、2015 年 6 月頃からみられていたわずかな伸びの傾向は、2015 年 10 月頃から停滞しています。

1) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

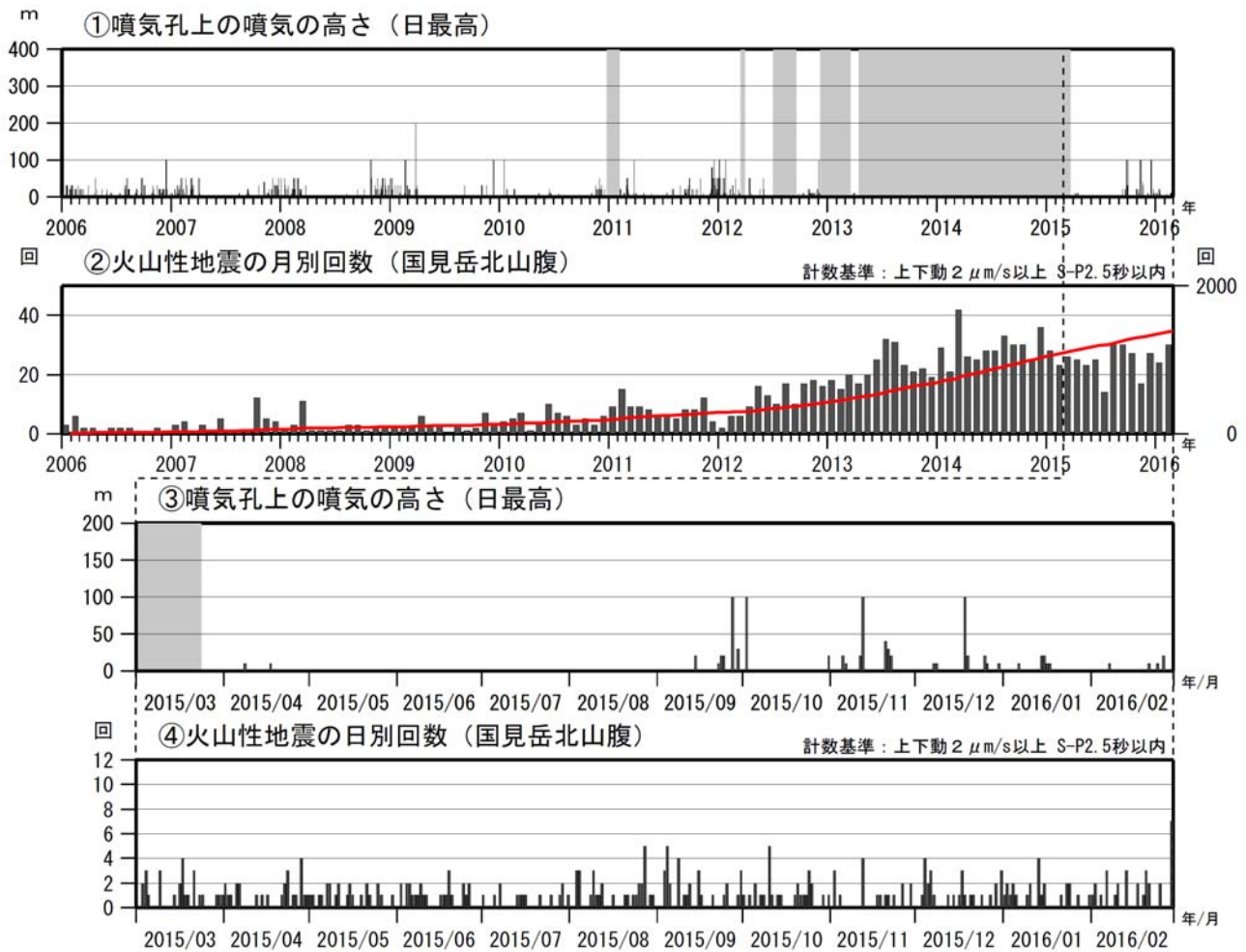


図 2 雲仙岳 火山活動経過図（2006 年 1 月～2016 年 2 月）

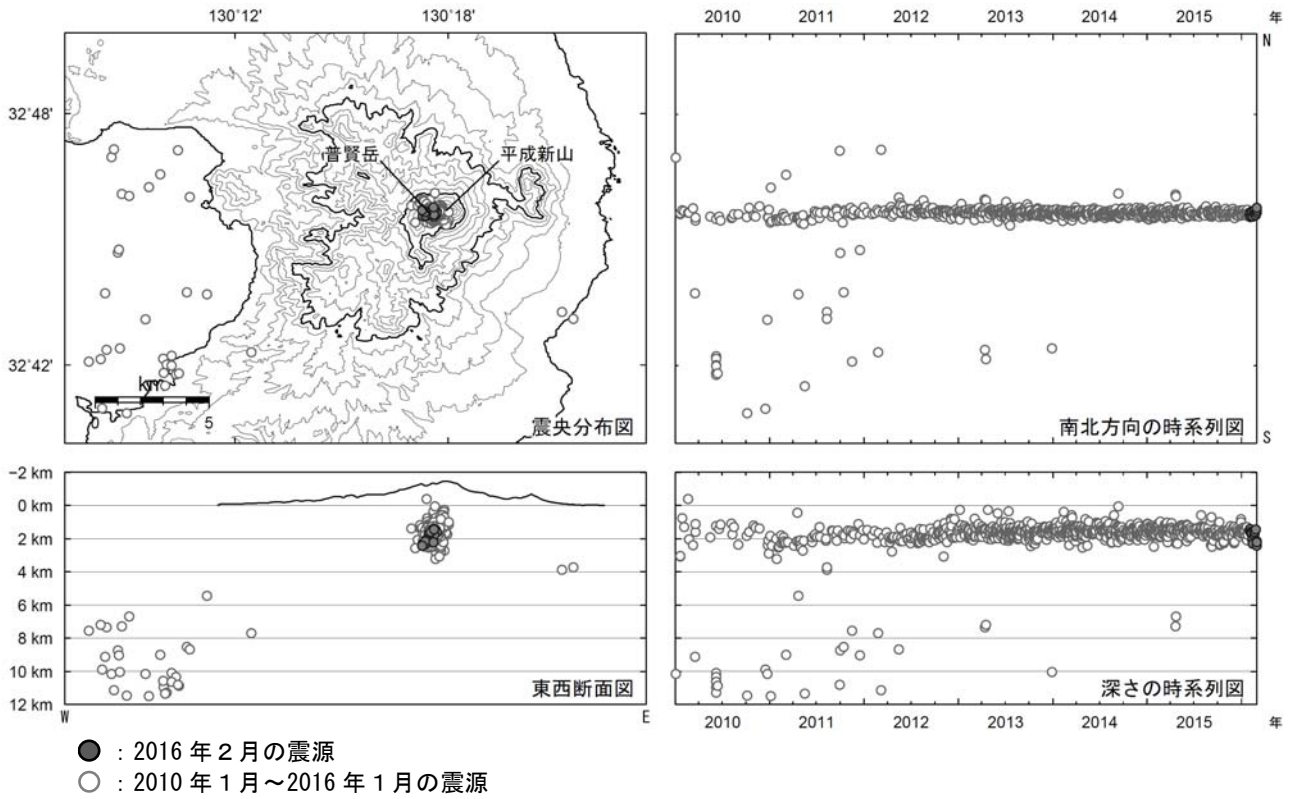
< 2 月の状況 >

- ・白色の噴気が時々観測され、最高で噴気孔上 20m まで上がりました。
- ・火山性地震の月回数は 30 回（1 月：24 回）と少ない状態で経過しました。
- ・長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっています。

火山性地震の回数については、2012 年 8 月 31 日までは矢岳南西山腹の計数基準（上下動 5 μ m/s 以上）で計数しています。

灰色部分は遠望カメラ障害のため欠測を示しています。

②の赤線は回数の積算を示しています。



● : 2016 年 2 月の震源
○ : 2010 年 1 月～2016 年 1 月の震源

図 3 雲仙岳 震源分布図（2010 年 1 月～2016 年 2 月）

< 2 月の状況 >

震源は、普賢岳付近の海拔下約 2 km に分布しました。

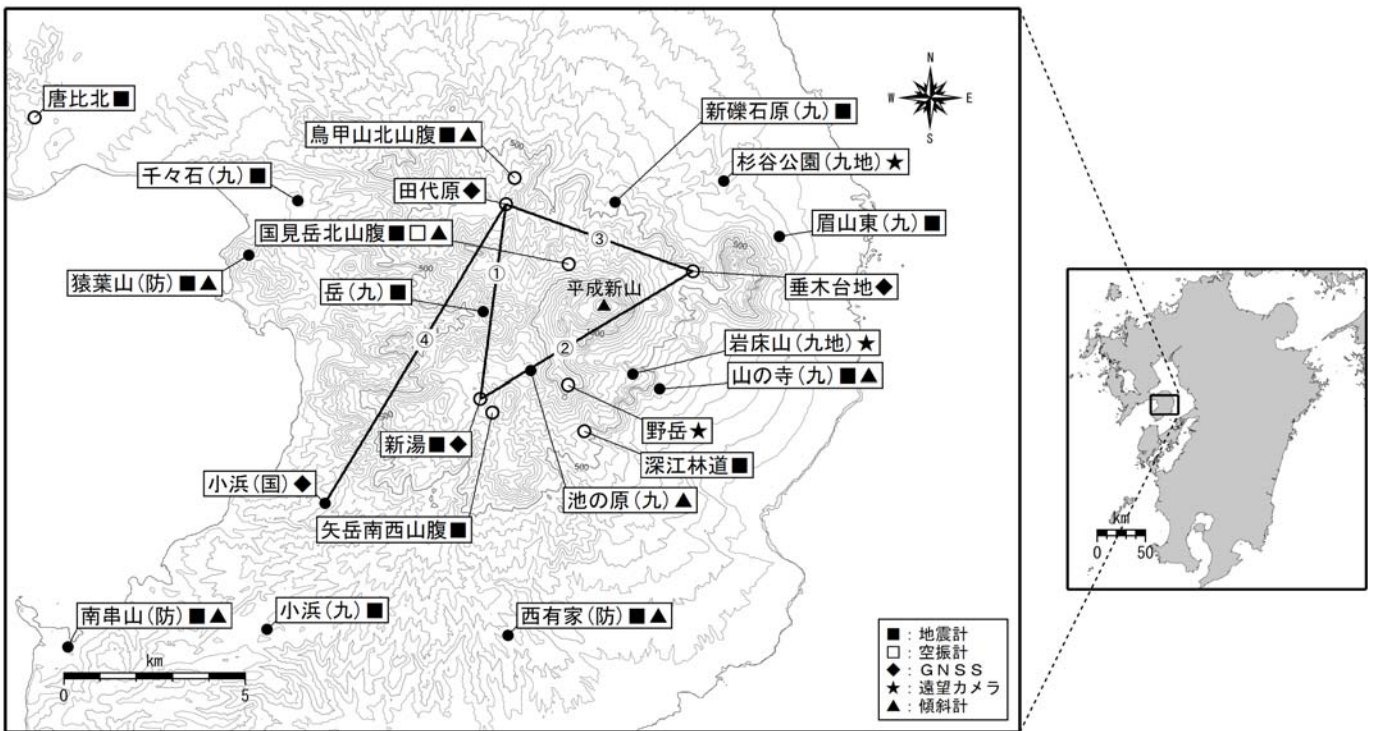


図 4 雲仙岳 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院、(九地) : 九州地方整備局、(九) : 九州大学、(防) : 防災科学技術研究所

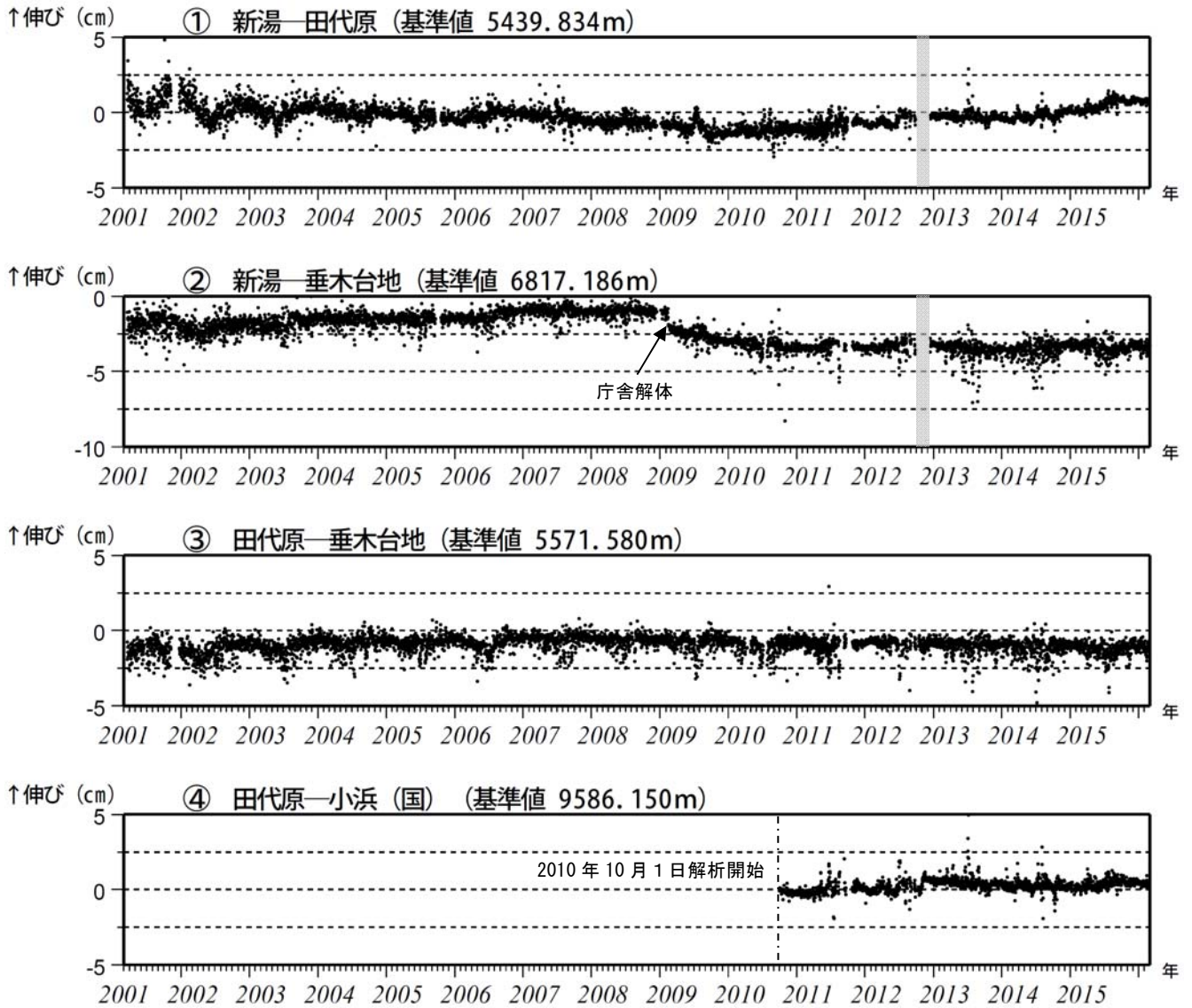


図5 雲仙岳 GNSS連続観測による基線長変化（2001年3月～2016年2月）

GNSS連続観測では、①新湯-田代原、④田代原-小浜（国）の基線で、2015年6月頃からみられていたわずかな伸びの傾向は、2015年10月頃から停滞しています。

この基線は図4の①～④に対応しています。

②の基線にみられる2009年2月の変化は、雲仙岳観測所の庁舎解体に伴う変動と考えられます。

2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

灰色部分は機器障害のため欠測を示しています。

（国）：国土地理院